

取りあえずエジプトまで来たものの、その後はどうやって東へ移動していくかのアイデアはまだなかった。

一応イラン、パキスタン、インドのビザを持っている。普通なら飛行機でイランの首都テヘランに入るだろう。そう思って旅行代理店に行くと、意外とテヘランへ行く飛行機は数が少なく、かつこの時期はとて高いうて事が分かった。

カイロはいろいろな国へ行く中継点なのだがこいつは盲点だった。というか、テヘラン自体が実はあまりメジャーじゃない為に、どこから飛ぶにしても競争があまりない感じだ。

飛行機の路線図を見ると中東の国々同士は、かなり密に結ばれているのだが、

『同じイスラムといってもイランはアラブではないからね』

と言わんばかりにテヘランは中東で孤立している感じがある。

困って地図を見ていると、

【エジプト スーダン エチオピア ジブチ イエメン サウジアラビア UAE イラン】

なんていう飛行機を使わない別のルートが浮かんできた。

すぐさまエチオピア大使館までビザをもらいにタクシーで乗りつけたのだが、その日はたまたま大使館が閉まっている。よくよく考えると、このルートを通ると1ヶ月や2ヶ月じゃあ済まされない。エチオピアとジブチ以外はイスラムで、ビールの調達上、それはちょっと困る。

結局、ビザの衝動買いをせずに済んだ。

それにしてもどうしよう。

さっきから、旅行代理店のカウンターを陣取り、ああでもないこうでもないアイデアをぶつける私。カイロの旅行代理店では、航空会社1社1社についてパソコンに入れて調べるから、担当が気が付かないと、いい案は出てこないのだった。

カイロからインドへ飛ぶフライトはあったが、そうなると、インド パキスタン イランとなつてまたもや西に進んでしまう。イランに辟易として、飛行機で一気にヨーロッパまで行ってしまいそうである。そいつはいけない。

そんな時、担当者が、『これがベストだ。カイロ アテネ(一泊) ドバイ』と言ってきた。何で今更アテネに行かにゃならんのだ。

さらにいろいろ調べていると、オマーン/マスカット経由ドバイ行きチケットがある事が分かった。早速その飛行機を手配する。

価格は1262ポンド(22,716円)であった。実にコシャリ飯1年分である。

## ドバイへ

カイロからオマーンの首都マスカットへ飛ぶには、サウジアラビアの上空を通過する。

砂漠である。

バスでの砂漠の旅は、行けども行けども砂漠なのだが、飛行機に乗っても、砂漠はひたすら砂漠だった。

ただ空からの砂漠は、時には雨が降るのか、洪水となって流れたあとの模様が見える。  
やがて夜になり、空気が澄んでいる為か、遠くに見える夕焼けがやけにきれいだった。

マスカットで飛行機を乗り換える。  
マスカットを離陸してからドバイに着陸するまでの時間を計っていたら、たったの 33 分だった。距離にすると 3 ~ 400 キロである。  
とても近い。とても近いのだが、マスカットの空港は、飛行機の乗り降りが、全てバスからの階段。設備も結構ダサイ。

対するドバイの空港はかなり近代的だ。  
ドバイは、中東のシンガポールとよく言われるが、シンガポールチャンギ空港よりも新しい分、より近代的な気がする。  
動く歩道はどの国の空港でもあるものだが、いつももっと幅があってもいいのにと思っていた。大きな荷物を持っている人の横は歩きにくいし、カップルは並んで乗ってしまっている事がある。ここドバイの動く歩道は何と 3 人が余裕で並べる幅だった。規格外の動く歩道は初めて見た。  
ドバイ、なかなかやる。

ドバイの概要。

- 1.面積：83,600km<sup>2</sup>
- 2.人口：375.4 万人（2002 年）
- 3.首都：アブダビ
- 4.人種：アラブ人
- 5.言語：アラビア語
- 6.宗教：イスラム教
- 7.略史：紀元前 3000 年頃にさかのぼる居住痕が存在。

7 世紀イスラム帝国、次いでオスマン・トルコ、ポルトガル、オランダの支配を受ける。  
17 世紀以降、英国のインド支配との関係で、この地域の戦略的重要性が認識された。  
1853 年、英は現在の北部酋長国周辺の「海賊勢力」と恒久休戦協定を結び、以後当地域は休戦海岸と呼ばれた。  
1892 年英の保護領。  
1968 年英がスエズ以東撤退を宣言したため、独立達成の努力を続ける。



飛行機から見たサウジアラビアの砂漠。ごく希に雨が降り、洪水になるのか乾いた河の跡が見える。



最新設備が備わったドバイの空港。もしかするとシンガポールチャンギ空港よりも、きれいかも。



1971年12月、アブダビ及びドバイを中心とする6首長国(翌年2月ラアス・ル・ハイマ首長国が参加)が統合してアラブ首長国連邦を結成した。

U E Aでは、酒が全く禁止というところもあるが、基本的にはレストランやホテルのバー、メンバー制のクラブで飲める事になっている。

飲めるのだが、しかしとても高い。

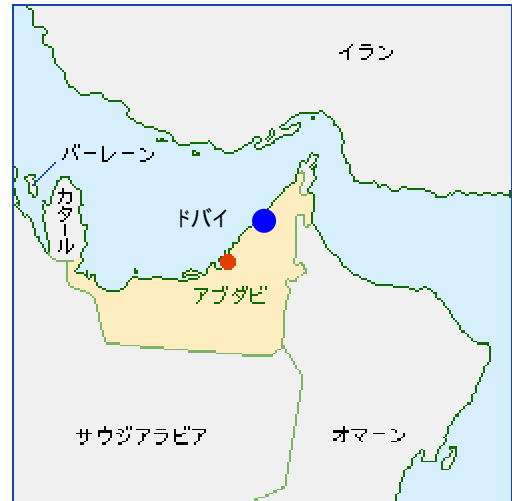
ロンリープラネットには、一例としてビールが1杯18ディルハム(545円)と書いてある。エジプトでは90円だったのに、急にそんな高いビールを飲むと体を壊すかもしれない。

だから空港の免税店でドバイ滞在分を買う事にした。

ドバイは4アイテムまで酒類の持ち込みがOKとなっている。ビールの場合、1アイテムとは12本。既に12本セットになって箱に入っている。

因みに12本で38ディルハム(1150円)だから、1本約100円。これならOKだ。ついでにワインも買った。フランス製の赤ワインが22ディルハム(666円)。重いのだが、こればかりは致し方ない。

何ととっても、ホルムズ海峡をちょっと渡ると、そこは酒を一切飲めないイランなのだ。



### ドバイの宿事情

空港でユースホステルへの行き方を聞くと、いったん街の中心まで行ってバスを乗り換える必要があることが分かった。一応お金はATMで下ろしたが、既に夜10時過ぎていることを考えてタクシーに乗ることに。

しかし空港のタクシーは、空港に入るだけで、20ディルハム(605円)が加算されているらしい。これじゃあ安宿に行く意味がない事になってしまう。

困っているとドライバーが空港の外に出て掴まえればいいと知恵を教えてくれたので、歩いて空港の外の通りに出て、バス停でタクシーを捕まえることにした。

しかしドバイは小さな街なのに、タクシーの運転手は意外とその場所を知らない。

ガイドブックには通りの名前が書いてあるだけなので、どのタクシーの運ちゃんも嫌がっていつてくれない。

30分ほど立ち尽くしていると、ようやく1台乗せてくれた。

ところが走ってしばらくすると、このタクシーの運ちゃんもホステルの場所を知らないことが判明。取りあえずガイドブックの通りに行ってみるが、なかなか見当たらない。ぐるぐる回ってくれて、運賃はどんどん上がっていく。

初乗り3.5ディルハム(106円)が、既に20ディルハム(605円)を越えている。

運転手はちょっと責任を感じたのか、ガソリンスタンドの売店でテレホンカードを買い、ユースホステルに電話してくれた。

場所を聞く為だったが、返ってきた答えは『満室』だった。

運ちゃん曰く、ラマダン(断食月)の前と後は、ピークらしい。

『観光の人もあるが、ビジネス客が多い。恐らくドバイ全てのホテルが埋まっているだろう』なんて事を平然と言う。さらにそして『値段も普段の倍になっている』と。

中東で一番物価の高い場所、とは聞いていたものの、そんな国にピークシーズンに来てしまうなんて実に間が悪い。宿代が高いのは覚悟しなければならないだろう。

しかし既にユースホステルの近くに来ていて、それは街の中心からかなり離れているのだった。この無駄金となったこのタクシー代は仕方がないが、さらにここから乗る分は何とかしたい。交渉を有利に進める為に、『どこか安全に野宿する場所は無いかなあ』などとあえて聞いてみる。すると、街の中心に公園があって、そこのベンチが良かろうとのアドバイス。実に本気で答えてくれるのだった。

タクシーの運ちゃんには、今日は25ディルハムしかないと告げてあったので(もちろん嘘だが)、運ちゃんが特別に合計25ディルハム(756円)でそこまで連れていってくれることになった。

でも彼がいみじくも、

『ドバイにはね・・・お金を持ってこないと来ちゃ行けないんだよ。金が掛かるところだからね』と。確かに・・・。

空港から街の中心部までバスだったら6ディルハム(182円)で来れたのに、とんだ無駄をしたもんだ。メーターは40ディルハムを指していたが、約束通り25ディルハムでいいという。この運ちゃんは時々ビールを飲むそうなので、25ディルハムに加え缶ビールをあげるととても喜んでくれた(今思えば、すべて缶ビールで払えばよかった気がする)。

### ドバイの公園

しかし、下ろされた場所は完全に“ドバイの中心”という感じの、30階建てのビルが立ち並び、ネオンがギンギンに光っている場所だった。

確かにそこには芝生があり、既に11時を回っていたがまだたくさんの人が座って談笑している(野郎のみだけ)。

一応ベンチもあるし、公衆トイレもある。

『グッドラック』と運ちゃんは言いながら去っていく。

運ちゃんが去ってからその界隈のホテルを幾つか当たってみたが、驚いた事に、本当にすべて満室だった。

参考までに値段を聞くと一番安くて200ディルハム(6211円)。エジプトのホテルの、実に67倍。さすがに泊まれない。

ドバイにも安宿街があるのだが、安宿街という割にはこれよりは少し安い程度である。そして部屋が空いている保証はどこにもない。

おっと何しろ、まだここがどこなのか分かっていない。いつも通り荷物は重い、今日はビールとワインでさらに重くなっている。買ってしまったことを早くも後悔した。

ねっとりとした湿ったなま温かい空気が気持ち悪い。もうこれ以上重い荷物を持って歩く気力がなく

なった。よし今日は野宿、と決め、どっかりと公園のベンチに座る。

マスカット経由だった為、機内食を2度食べていたので腹は減っていないが、喉がとても渴いていた。さすがに自販機はないが、見渡すとケンタもマックも、ピザのチェーン店もあった。

しかし、いったん座ってしまうともう動く気がしない。

ふと大量のビールを持っている事に気づいた。

公共の場で飲んだ場合、ドバイから10キロ離れたシャルジャという首長国では逮捕されるらしいが、ドバイは少し緩いのできっと問題なからう。

暑いビールだけどやむなし、と思い飲み始める私。一気に街の人気ものである。一応回りの人にも勧めてみるが、さすがイスラム、誰も乗ってこない。

3 本目のビールを飲んでいる頃、隣のベンチに座っていた男が英語で声を掛けてきた。まだ眠くなかったので暇つぶしに話す事に。

彼は、バングラディッシュから出稼ぎで来たという。現在は洋服屋の店員として働いている。さっき仕事が終わったのだが、リフレッシュする為に公園に来たらしい。

宿にエアコンは付いているが、狭い部屋に6人で住んでいて、ちょっと息が詰まるそうだ。

彼の月給は1500ディルハム(約4万5千円)。その内の3分の1程度を、女房と一人息子の為に送金している。

ドバイでの住居費(シェアしているので200ディルハム)や食事代は、自分の給与から出すのでそれほど楽ではないとこぼす。

このドバイでは多くの出稼ぎが1000~2000ディルハムの月給で働いているらしい。出身国はイラン、パキスタン、インド、バングラディッシュなどなど(出稼ぎの人間の方が、国民より多いという変なところなのだ)。

そう言えば、普通のイスラムの国とは違い、アラブ人の他に、たくさんの人種がいる。黒人も中国人も多い。

結局彼とは1時半まで話していた。もしかしたら野宿仲間? と思っていた芝生の人々も次々に帰って行く。何だ野宿は俺だけか。

公衆トイレで歯を磨く。持っていたダイヤル式チェーンでリュックをベンチにつなぎ、そのベンチのそばの芝生に寝袋をひいて、ナップサックを枕に寝たのが2時。

新宿ほどではないが、ドバイの繁華街はいつまでも人の往来が切れないし、車の騒音はうるさいが、すっかり酔っ払っていたのであつという間に眠りに落ちた。



ドバイのパニヤス広場に夜涼みに来たバングラディッシュ人。仕事帰りらしい。



ところが・・・、2時半の出来事。例によってスプリンクラーである。

もうアテネで懲りていたので、寝袋をひく場所を決める際、一応芝生にスプリンクラーがないかを確認していたのだが、何と自分の寝ている場所のすぐ側から2ヶ所、それも“ミスト系”と“しっかり系”の水2種類が吹き出して来ていた。

さすがドバイ、アテネよりも高性能のスプリンクラーを設置しているようだ。機器そのものも小さくて、芝生の穴など分からないほどだった。感心している場合ではない。

缶ビールでブロックすると共に、仕方なく一時避難。散水は15分ほど続いた。

散水が終わるとビールが適度に冷えていた。すっかり仕切り直し。アテネの時より知恵が付いている私、なかなか素敵である。



またしてもスプリンクラーの攻撃に遭ってしまった野宿場所、ドバイのパニヤス広場。

翌朝6時にはもう明るかった。

気が付くと十何人かがこの公園で寝ていた。どうやら昨日の水撒きの後に来た人のようだ。みんな良く知っている。

この場所は、【パニヤス広場】という事が分かった。確かにドバイの中心かもしれない。早朝から街が動き出している。

ラッキーな事に、ツーリストインフォメーションがこの公園にある事が分かった。9時に開くのでしばらくその横で待つ。

今日まずなす事は、“如何にこのドバイから脱出できるか”を調べる事である。

UAEからイランまで、週に何度かフェリーが出ているという情報はガイドブックに載っていた。

ドバイからのと、10キロ離れたシャルジャからのがあるらしい。

これだけ物価が高いなら、できるだけさっさとイランに行きたい。

でもシャルジャは、酒の持ち込みが禁止なので、今日は行きたくない。

一方、ラマダン(イスラムの断食月)中はできるだけイランにいたくないって気持ちもあたりしてなかなか複雑である。



ドバイの中心部にあるパニヤス広場。深夜1時ぐらいでも人の往来が絶えない。

9時きっかりにツーリストインフォメーションが開いた。

スタッフは、白い民族衣装を来たなかなかの男だった。彼に相談すると、『おおっ、俺に任せろ』という。

ただ、ここにはフェリーの情報は無いという。まずは歩いて 5 分のところにある旅行代理店と一緒に来てくれた。ドバイ人、なかなか親切(でもその代理店は知らなかった)。

その後、このインフォメーションに荷物を置かせてもらい、自力で 10 軒ぐらいの旅行代理店に行ってみるがまるで情報無し。

この航空大拠点のドバイから、何でフェリーなの? という反応ばかり(もしくは、ヘーフエリーがあるんだ、という反応)。

ツーリストインフォメーションに戻ると、インフォメーションの彼が、いろいろと調べてくれていた。ドバイは首長国連邦を構成する 1 つの国である。たった 10 キロとはいえ、隣のシャルジャも 1 つの国である。まさかドバイのツーリストインフォメーションが、隣の“首長国”まで電話してくれるとは思わなかった。

結局これが功を奏し、フェリーの情報を得た。ラッキーなことに明日このドバイから出港するらしい。

しかし値段は 205 ディルハム(6,366 円)。ちょっと足せば飛行機に乗れる様な金額である。さすがドバイ油断できない。めちゃめちゃ高いが他に選択肢がないのでやむなし。泣く泣くそのフェリーに決めた。もうこれ以上、ドバイにはお金を落とさないぞ。

### ドバイ砂漠ツアー

ツーリストインフォメーションには、お金持ち様のたくさんのレジャーが紹介されていた。

フィッシングあり、ダイビングあり、エステあり。砂漠のツアーなんてのもある。

これまで砂漠を通ってきた私にとってみれば、何を好きこのんで砂漠に行き、一体何をやるんだらうと思うのだが、まあ人それぞれだ。

ふと気が付くと、このインフォメーションに日本から来た女子学生がいた。砂漠のツアーに参加したいので情報集めに来たらしい。

やっぱりドバイに来たら、砂漠ツアーだろう。140 ディルハム? 全然問題ない。

即座に参加する事にした(電話で申し込んで値切ったら、130 ディルハム(3,933 円)で妥結)。

夕日の落ちる砂漠を見ながら、二人の距離はだんだんと近づき……。

いかんいかん、純粋な砂漠ツアーである。

ツアーのガイド兼運転者は、さすがにドバイ人だった。アラブの白い民族衣装を身にまとい雰囲気作りをしている。

車はトヨタのランドクルーザー。

彼曰く、『韓国の車だと 1 年しかもたない』のだそうだ。日本の車を褒めてくれるのは嬉しいが、韓国の車も悪くないぞ、と思ったら、『日本の車は 3 年ももつ』なんて事を言う……???

でもその理由が分かった。

ドバイの街から 30 分も走ると、そこは砂漠の入り口だった。

ここにあるガソリンスタンドで、給油ではなくて、タイヤの空気を抜く。

他の車と合流し、砂漠に入る。

砂漠は、山あり谷ありで、そこを走るもんだからドカンドカンと体が上下左右に揺れる。シートベルトをしていないとたいへんなことになるくらい。車に弱い人は直ぐに酔うに違いない。隣に座っている女子学生は大丈夫なようだ。

夕日の落ちる砂漠を見ながら、二人の距離は、一気に近づき、頭を打った。

お互いシートベルトをがっちりしているのに頭突きである。それほどすごい。

まあ、まずはこのジェットコースタードライブを楽しむツアーらしいのだが。

夕日がきれいに見える砂漠の丘には、他のツアーの車が20台近くいた。

夕日は実にきれいだったが、何だか一運動した直後のようで、ジーンと静かに沸き上がる感動はない。

ジーンとしているのは頭である。

20台の白いランドクルーザーが隊をなして砂漠を突っ走るのは圧巻である。

さらに走ると、砂漠にぼつんと野外宴会場があった。

砂漠のレストラン兼ダンス会場らしい。

ここでお客は、駱駝に乗ったり、民族衣装を身に着けて写真を撮ったり、サンドボードができるらしい。

サンドボードとは、砂でやるスノーボードの事である。器具は、完全にスノーボードのものである。一応チャレンジしてみたが、重たい雪をすべるような感じであまり面白くはない(転ぶと、あらゆるポケットに細かい砂が入って、その後数日は体のどこからか知らないが、何故か砂がたくさん出てくるのだった)。

このレストランのバイキングは、旅行代金に含まれていて食べ放題である。飲み物も飲み放題である。ただしソフトドリンク。

しかし、嬉しい事に、酒も売っている。

私が免税店で買ったのと、全く同じ銘柄のビール、ワインが置いてある。



砂漠を激走するランドクルーザー。横転しそうな斜面や凹凸を走るので、シートベルトは必須。



まるで砂漠ラリーをするかのようにトヨタの車が現地集合する。20台くらい集まるとなかなか圧巻。



	空港免税店	このレストラン
・ビール	3.2 ディルハム(100 円)	10 ディルハム(303 円)
・ワイン	22 ディルハム(666 円)	75 ディルハム(2,269 円)

リュックから何気に両方を取り出したのは言うまでもない。

密かに飲む酒って、特に美味しい。

イスラムの人たちの中にも、こうやって飲んでいる連中もいるんだらうな。なかなかイスラムを感じさせるツアーである。

このツアーの最後のとりは、ベリーダンス。イスラムの伝統的な踊りらしい。

音楽に合わせ、若くてきれいな女性が出てきて悩殺的に踊る。

始めは身に付けていた黒いショールを取ると、大きな胸が強調されて、さらに興奮のルツボへ。この腰の振り方がもうものすごく、あれに対抗できるのはリオのカーニバルくらいだろう。

しかしイスラムでこんなのやっていいのか、と思うほどセクシーである。

できればイランへ連れて行きたいくらいだ。

そう明日は、暗黒のイランなのである。

つづく



すごくセクシーなベリーダンス。腰の振り方が特に激しい。一体どこの筋肉を鍛えたらあんな風に見えるのやら。